

「言語と人間」(現代教科教育学大系2)

本書は、「教科教育学の学としてのつっ込みが、浅い」(まえがき)ことへの批判のうえに編まれた野心作である。内容は、I 言語教育の哲学と思想 I 言語教育への学際的視点

II 教科教育としての言語教育 IV 言語教育の未来像 V 言語教育の実践と探究 の五部からなっている。言語教育(国語科・外国語科教育)の全貌を見通す論究を意図するものである。執筆者は研究者・実践家から32名をえて豪華であるが、このような総合的な書物を読む魅力はどんなところにあるであろうか。

「まずは、編者の活躍である。全編をとおして、編者の目がいきとどき、編者の方針が徹底して貫ぬかれている。五部とも、最後の章節には編者の論があり、各部の全論文をふまえた、目のさめるようなしめくりがある。読者は、各部を読み進めながら、自由に判断しつつ、最後にいたって、その判断を編者のそれと比較検討するという、読書の最上の部に属する楽しみを味わうことができる。研究論文を読むばあい、論旨に賛成したり、くび

をかしげたり、意見を加えたりして読むことに、論文読みの魅力があるのだが、その読み方を編者は実地に示してくれている。

編者の努力の結果、言語教育研究の体系を明示するものとなっている。自分の意見は言語教育のどのような部位についてのものか、もっと考えなければならぬ対象や視点はどうか、など数々の示唆を与えてくれる構成である。たとえば、第I部は、1 言語と人間、2 言語と社会、3 言語と文化、4 言語の機能と言語教育、からできていて、人間・社会・文化・教育と整然たる系統のもとに、言語教育の本質が論じられている。

そのうえ、言語教育を「たての流れ」(歴史)と「横の見渡し」(比較)のもとに広大な展望を与えてくれる点がありがたい(第III部)。加えて、これからのありかた「未来像」(第IV部)にも触れて、全体的眺望がえられしくみである。

理論だけでなく、実践の具体例を掲載している(第V部)のも、言語教育を考察する

うえで欠かせない要件を満たすものといえよう。ここにも編者の指摘が加えられて、実践をどう捉えるか、という言語教育研究の基本問題が論じられている。研究者・実践家ともに有益である。

私たちの視野を一挙に拡大してくれるのが、第II部「学際的視点」である。外山氏のユニークな指摘、社会心理学や言語心理学などの成果には、数々の貴重なものがある。簡単に周辺領域の知識を仕入れることのできるのも、本書の魅力の一つである。あわせて、全編にわたり、引用文献や参考文献に教えられるところが多いことをつけ加えておこう。最後に、外国語科教育についての系統的知識が同時に学べる点をあげておきたい。

(昭和49・5・31、第一法規出版刊、A5判

三八四ページ、一六〇〇円)

(中西一弘)